

Vision

セックスとジェンダー

横浜市立大学医学部第2生理学教室

貴 邑 富 久 子

最近、日本においても遅ればせながら、女性を一人の社会人として認めなければ、という風潮が出てきたように見える。1947年施行の日本国憲法では、人権委員会の一人の女性の努力によって「男女平等」が謳われた。しかし、やっと1985年になって男女雇用機会均等法が成立、1997年に、改正された同法が施行された。そして、1999年に男女共同参画社会基本法が成立、施行された。科学の世界においても、大変遅い歩みではあったが、男女共同参画が指向されるようになってきた。日本生理学会では、2002年度に男女共同参画推進委員会が新設された。2002年10月7日には、自然科学系諸学協会が中心となって、男女共同参画学協会連絡会が、文部科学省・遠山大臣出席のもと設立された。日本生理学会からも会長と上記委員会委員が参加した。

大方の男性は、しかし、このような流れを、正しい理解とともに受け入れているわけではないことを、常日頃、強く感じている。それは、あとで述べるように、約1万年続いてきた男性優位社会に起因することは明らかである。男性は当然のごとく、身体、脳ともに女性は男性の劣位にあるのに、なぜ、男女共同参画して社会作りをしたり、学問をしなければならないのかと考えるのだろう。しかし、問題は、果たして、本当に女性は男性に劣るのか、ということである。私たちのような科学者は、わけても身体、脳の機能を学ぶ生理学者は、ここで、この点を明確にする義務がある

う。もし、明らかにされていないものがあるなら、そして、誤って喧伝されているものがあるなら、これも私たちの生理学の対象とするべきである。

男性優位性は政治や社会を完全に掌握してきただけでなく、真理にかかわるはずの科学にもバイアスをかけてきた。たとえば、男性研究者たちは当然のごとく、400万年前のアウストロピテクス原人以来、狩猟、採集を男がやり、家事を女がやる、という性別による労働の厳格な区別があったとしてきた。しかし、女性研究者ジールマンは、自然物の採集時代には女性も重要な採集者で、厳格な労働の性役割はなかったと、この十数年反論している。私も、男性優位の性役割ができたのは、攻撃性などに関する生理学や動物行動学などから、約1万年前の農耕、牧畜の開始に伴う定住からであると推測している。そして、男性優位社会が成立すると、男性たちは、男女の生殖器は全く同じであると決めつけた（1つのセックス学説）。BC4世紀にアリストテレスは、女性生殖器を男性生殖器の劣化したものと考え、そこから女性を「劣った男性」と見なした。この学説をガレノスが引き継いだ。ルネッサンス期にもこれが通説であった。しかし、政治的には異なるセックスが存在した方が世の秩序が形成されやすいので、男性の支配を可能にし、女性の従属を強いるような政治的な性、ジェンダーがもうけられた。政治的に男女を区分したのである。18世紀になって解剖学と生理学が台頭すると、さすがに男女の生殖器

は異なる対立者であることを認めたが(2つのセックス学説)、ジェンダーがそれぞれにあてはめられた。

このように、人類は、遅くとも定住開始以後は、生物学的性、セックスとともに、これに対応した政治的性、ジェンダーをもつことになった。現在ではジェンダーは社会的・文化的な性と言いなおされてはいるが、性役割で区分した人為的な性であることに変わりはない。生物学的性、セックスは遺伝子的に作られ、歴然とした身体と脳の性差を表出している。内分泌機能、本能、情動などの解明には、一部私自身も関わって来ており、これらの性差に疑問を差しはさむ余地はないように思う。一方、1万年弱のジェンダーの歴史が、われわれの身体と脳に遺伝子的な痕跡を残しているのかどうかは疑問である。近年の神経科学は、少なくとも脳においては、特に認知、言語、記憶などにかかわる神経回路発達が生後の環境刺激に応じて起こることを明らかにしてきているので、遺伝子的であるとは考えにくい、あるいは、全面的に遺伝子的ではあり得ない。したがって、与えられる環境刺激がセックスや性役割によって異なれ

ば、異なる神経回路ができあがるのも当然あり得ることである。例えば、雌性ラットは、通常用いられている堅い固形餌で育てられると迷路学習の成績が雄性ラットに劣るが、柔らかい粉状の餌で育てられると雄性ラットと同等の成績を示すことを私たちは見いだしている。これは、環境刺激が、認知の神経回路に性差を作りうることを示唆している。

生理学者は、身体と脳の両方について、本当に女性は男性に劣るのか、あるいは差があるのかを、セックス差のみならずジェンダー差を差し引いたらどうなのか、という観点から明らかにする義務があると私は考える。これは、私自身も受けている、一般社会からの要請でもある。このような研究を積み重ねることで、バイアスのかかっている可能性のある性差データを正すことができ、そして生理学者自身が男女共同参画して社会をつくることの意義を納得することができるものと思う。ここまで述べたら、たとえば、しばしば、ラットの何々機能におけるジェンダー差、などというタイトルの論文を見かけて憤慨している私の気持ちもご推察いただけるのではないだろうか。